



## 長倉先生と私

Akira ISHITANI 石谷 炯 長光会，神奈川科学技術アカデミー元専務理事

長倉三郎先生の訃報に接し大きな衝撃を受けた。先生  
の存在は私の中で大きな部分を占めており，その喪  
失感に苦しんでいる。人は，いつかは亡くなるもので  
あるが，私には先生はいつまでもおられる，少なくと  
も私の方が先と思っていた。先生の一族は長命の人が  
多くご自身も最低 100 歳と言われていた。新型コロナ  
ウイルスが全世界を覆う時期に亡くなられたことは啓  
示的で，先生はご自身とともに世界が減びるという感  
覚を持たれたのではないかと，ふと思った。巨大な学  
問的業績を残され多くの人々を育て社会的にも大きな  
貢献をされた先生の死は，誠に残念でご冥福を祈りたい。

私は 1961 年，茅幸二氏と東京大学物性研究所にあっ  
た長倉研で修士課程に入った。2 人とも本郷で有機化  
学の研究室に行く予定だったが，細矢治夫氏の勧誘で  
先生に会い，例の「やー」という笑顔に転向を決めた。  
先生は怖いという反面，人々を惹きつける大きな人間  
的魅力を持たれていた。60 年代は長倉研の成長期で急  
速に大きくなった。番頭格の坪村宏氏，田仲二郎氏，  
院生も東大以外やほかの研究室から移る人もいて，後  
に活躍する俊秀が集まった。一時的に滞在する人も多  
く，私も桑田敬二氏や 1 年だけ米国から戻られた宮川  
一郎氏の指導を受けた。先生は許容性が高く様々な経  
歴の人々や政治的信条の異なる人，女性研究者なども  
積極的に受け入れられた。その時代では珍しいと思  
う。当時は日本経済も成長期で大量生産消費の時代で  
あったが，先生は「これは持続できない」と言われて  
いた。それが理解できず古いと思ったが，今になると  
その先見性に驚かされる。

長倉研はハードワークで盆も正月もなかった。先生  
もかたときも休まれず，帰宅されると玄関そばの書齋  
にすぐに入ってしまわれると奥様も嘆いておられた。  
研究室の旅行中でも小仏峠の茶屋で論文の校正を始め

られた。研究室の雰囲気は自由で楽しく活気があっ  
た。先生は分光光度計のペン先を掃除するワイヤーを  
秘蔵され，惜しそうに出して下さるご様子も懐かし  
い。当時は先生も若い気鋭の学者で戦前の海軍大尉ら  
しく，しゃきっと姿勢が良くハンサムでもあった。あ  
るとき豪華な花束が届いた。カードに「?丸」とあっ  
たので，茅さんが芸者からだと騒いで叱られた。秘書  
には先生の指示もなく，花は部屋の隅で枯れた。

その後，長い間私は企業において先生との接点は少な  
かった。ただこの間に先生は国際純正・応用化学連合  
(IUPAC) の会長をされ，偶然コペンハーゲンの総会  
でお見かけした。国宝の豪華な市庁舎で女性市長の格調  
高い挨拶があり，続いて先生が話された。正直少し不  
安を覚えたが先生は静かに演壇に立たれ，実に堂々と  
した態度で話された。弟子の 1 人として誇らしく感動  
した。

卒業後 30 年以上たって不思議な縁で再び先生に巡  
り会った。神奈川科学技術アカデミー (KAST) で理事  
長の先生の下で専務理事として働くことになった。  
KAST は主に大学の基礎研究を展開して企業化につな  
げる，当時としては先進的な試みで，長洲一二知事，  
齋藤進六氏，額田健吉氏等が立ち上げた。これはなか  
なか難しい事業であるが，先生は変わらぬ熱意と的確  
な判断力で成果をあげられた。藤嶋昭氏，橋本和仁氏  
の光触媒，北森武彦氏のマイクロ化学などである。し  
かし後年は県の財政難や人々の無理解など，ご苦勞も  
あったと思う。退任後もよく来られ，長時間親しくお  
話できたのは望外の喜びであった。

人生の始めと終わりに長倉先生に直接教えを受ける  
ことができた私は真に恵まれており，一生先生の掌の  
中にいた気がする。先生のご冥福を重ねて祈りたい。

© 2021 The Chemical Society of Japan